

東京バッハ合唱団 月報

[第 694 号] 2020 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 694

April 2020

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

よみがえりの春

大村 恵美子 (主宰者)

復活祭を迎えました。
おめでとうございます。

毎年、北風吹きすさぶ冬を送って、生命よみがえる春を身体にまで感じ、深呼吸を深々としてみる——。そんな 4 月ですが、今年は突然、全世界の人類は、生物とも物質ともつかない、まるで正体のわからないものの急襲を受け、たじたじとなってしまいました。

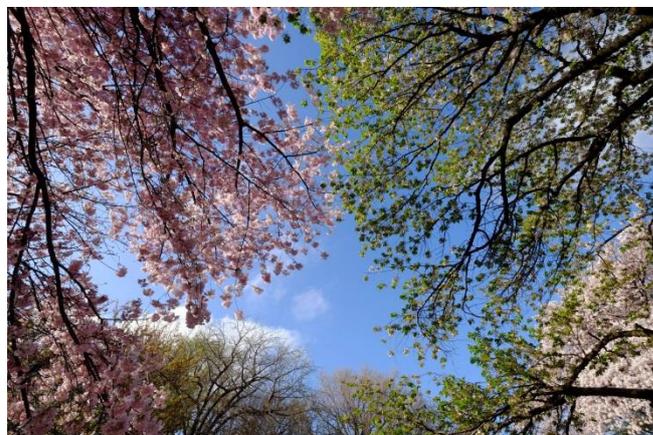
あわてて過去の資料を調べた方々の報告によると、これは地球上でも、測りきれない昔から何回か発生した種類のものだそうで、いずれ熱暑が訪れるころには終息することもあった、とか(?)……。

そこで大騒ぎとなり、退散してもらうためには、人間のほうで活動をやめて、一日中動かなくなるのが第一と教えられます。2 月の末から活動自粛に追い込まれたわが合唱団も、4 月 4 日に緊急の会議をおこなって、今後の方針について、頭脳をふり絞りました(荻窪教会にて。5 月連休まで練習中止、5 月 9 日より再開。以降の予定などについては後報)

相手がまったく把握できない新型のウイルスですから、どんな体験も判断の物差しになるものはありません。でも私個人としては、さいわい上乘の健康状態なので、平常心を保持するためにもバッハの力強いカンタータを、みなさんと歌いつづけてゆきたい。あれもダメ、これもダメ、と身も細るような時を重ねては、かえって死を招きかねない。

平静で賢明なよき指導者を、世界中に、血まなこで探して、柔軟で爽やかな日々を、私たちの手で、朝ごとにつくりだして生きられるよう、みんなで精一杯に試みましょう。どんなきっかけで倒れることがあっても、危機の終りは、必ず来てくれるでしょうから。

私たちが、今夏の課題に選んでおいた数曲の新しい教会カンタータ (BWV 78, BWV 93, BWV 113, BWV 184) は、びっくりするほど、この摩訶不思議な世界情勢に処するにピッタリな内容なのです。練習して、それが体内に熟してくる頃には、何らかの救いがあることを信じてみましょう。(4 月 7 日)



■ 巻頭言とのコラボ「春の花々」 [写真: 千葉光雄 (団員) p1~p3]

日本語版バッハ・カンタータ楽譜 出版開始から 20 年 [中]

- ・普及の手段として
- ・なぜ、ブライトコプフ? } (前号に掲載)
- ・ブライトコプフとの交渉
- ・資金のこと、営業販売のこと
- ・版下製作、どんな作業?
- ・訳詞上演の意義 — 文明の課題として — } (次回)

大村 健二 (団員)

前号では、ブライトコプフ版以外に選択肢がなかった、と記しました (月報 No. 693、3 月号、p4)。

要点だけをくり返せば、訳詞つき楽譜シリーズを発刊するにあたり、企画の時点 (1990 年代末) では、「新バッハ全集」に準拠した既刊のピアノヴォーカル譜は、わずかなポピュラー作品に限られており、代表作 50 点を一挙に世に出そうとしたわれわれの当初の企画 (後述) のレパトリーを満たしていなかった。当時バッハの全カンタータ (約 200 曲) にわたってピアノヴォーカル譜を揃えていたのがブライトコプフ社だったのであり、翻訳出版権の交渉相手が、こうして定まったわけです。

* * *

ところで、交渉の流れの中で重要な役割を果たしたのが、当時、団員の加藤剛男氏が勤務していた丸善株式会社でした。すでに同社の丸善ライブラリーの 1 冊に『バッハの音楽的宇宙』 (1994 年刊。本年 5 月、電

月報 2020 年 4 月号 CONTENTS

- ・日本語版楽譜、出版から 20 年 [中] (大村健二) …p. 1-3
- ・2021 年の演奏曲目 (大村恵美子) …p. 3-4
- ・コラボ写真「春の花々」 (千葉光雄) / 事務局界限

子書籍版で復刊予定)を著わしていた大村恵美子は、そのご縁で、当時配本されたばかりの「新バッハ全集」の1冊(Serie III, Band 2, Teil 1)から「シエメルリ歌曲集からの宗教歌曲とアリア」の章を独立させて、歌唱用の訳詞を添えた『J. S. バッハ宗教歌曲集』(1996年刊)を、丸善傘下の丸善プラネット社から出版しました。このとき、底本(「新バッハ全集」)版元のペーレンライター社との著作権交渉にあたったのが、翻訳書出版の実績豊富な丸善の出版部門でした。

われわれのカンタータ楽譜の出版に際しても、その担当者の助力を得て、こんどはブライトコプフ社との著作権交渉を始めたのです。輸入楽譜・音楽書販売のアカデミア・ミュージックの佐久間和男氏(現社長)にも相談にのっていただき、販路を探りながら部数や価格を決め、ブライトコプフとの契約条件を詰めていきました。

当初先方の提示した条件は、新規に出版される楽譜に付す歌詞は日本語訳詞のみとする(原詞ドイツ語は載せない)、つまり販売圏を日本国内に限る、というものでした。自社の楽譜との競合を避けるという、営業上のまったくもつともな理由でしたが、天下のブライトコプフ&ヘルテルの楽譜を押しつけてまで、販路を世界に広げようなどとは夢にも思っていなかったわれわれは、驚き、かつ落胆しました。

考えてみれば、われわれの版にドイツ語原詞を残した場合、ブライトコプフ版楽譜を選ぼうとする、世界中のバッハ・カンタータ上演者にとっては、オリジナルの同社ヴォーカル譜を使おうが、新規の東京バッハ合唱団版のヴォーカル譜を使おうが、機能的にはまったく差異がないわけです。手近にあるか、どちらが読みやすいか、価格は、手触りは、デザインは……などで、購入者は選ぶことになるのでしょうか。敢えて加えれば、「新全集」校訂による決定的な訂正箇所などについては、可能な限り手直しを施しているわれわれの版のほうが優っています。

結果としては、わが国の精神文化のうすっぺらさのお蔭で、ブライトコプフの怖れは杞憂に終わったのですが、そのことは後に触れます。

われわれとしては、ドイツ語原詞の付いていないバッハの楽譜など、想像もできません。バッハの音楽と歌詞(原詞)は一体のものであり、われわれが訳詞上演を選んだことと、原詞を無視することとは、まったく別のことです。ブライトコプフ社の提示条件に対しては、「われわれは、バッハのことばと異なることばをつかう国の享受者として、訳詞(母語)で歌い、かつ原詞で歌い、意味と音楽の流れの両方を味わいたい、ドイツ人が味わってきたように」、と訴えたことは、だいぶ以前の月報でも紹介しました(月報 No. 535、2007年1月号、『東京バッハ合唱団半世紀の歩み』p95〜に再録)。その後、ブライトコプフ社の版權担当、ヴィヴィアン・レーマンから、「了解した。あなたが



たの楽譜を世界中のどこでも売って結構」という返書が届いたことも上の月報に記しました。ドイツ語・日本語並記が、かくして実現したのです。

* * *

先述のような著作権交渉の経緯があって、われわれの楽譜の制作は、先に『J. S. バッハ宗教歌曲集』を扱った丸善プラネット社に委託することになりました。

当初の企画は、活動開始(1962年)からその時点までに上演したカンタータ作品の中でも、団員に人気で、またバッハファンにも愛されている代表作を50曲選んで、集中的に世に出そうとするものでした。「バッハ・カンタータ50曲選」というシリーズ名で年に10曲ずつの刊行を開始し、5か年で完結しました(2004年)。開始の2000年が、ちょうどバッハ歿後250年の記念年にも重なり、いくつもの全国紙等に紹介されて、上乘の滑り出しをしたように見えました。

ところで、制作を委託するとはどういうことかというところ、版下製作と印刷製本までの行程を請け負ってもらっただけであって、企画や資金調達、販売営業などの、出版事業の主要部分は、すべてこちらの任務です。原稿を渡し、出来あがった本を受け取る。そして制作費を支払う。それが自費出版というものです。

「50曲選」の場合、当時の団員、後援会員の方々に呼びかけて、5年だったか、10年だったかで償還する債権を買ってもらったり(確か10%ほどの利回りにして返済しました。全額を寄付としてくださった方もありました)、ほとんどの団員が、全50巻の予約販売に協力していただき、資金のほぼ半額が調達できましたが、残りの半額ほどは、制作会社への借金になり、20年後の今も、細々ですが返済をつづけています。

ライプツィヒのバッハ・アルヒーフの所長にお目にかかり、第1回配本の10曲の楽譜を贈呈した際、自費出版だということを説明すると、日本では、こんな大事業を個人がするのか、と驚いていたことも、以前に書きました。

企画については、前回もふれたとおり、団員のお一人(松尾茂春氏)の発案であり、創立から40年ほどの間に主宰者が訳出して、実際の舞台にのせた(多くは再演、三演と回を重ねるごとに改定を施した)訳詞書

き込み付きの楽譜が、完全な原稿として、そろって出版の順番を待っていました。

都内の大型書店や楽譜楽器専門店などへの売り込みには、前述の加藤剛男氏をはじめ、多くの団員、元団員もご協力くださいました。京都・大阪方面の楽譜店・書店・大学生協書籍部・キリスト教書店にも出向きました。ブライトコップ社への年次報告書を見返してみると、10曲ずつの初期の配本のころ(2000年から数年)は、どの曲も100冊を超える売り上げでした。とは言ってもその内50冊前後は、団員の方々が予約販売で購入してくださったものですが。

数年を経て分かったことは、楽譜づくりの場合、経費の相当部分を、版下製作の人件費が占める、ということでした。そこで、この版下製作も自前でこなしてしまおうと、大転換を図ったのです。家庭用のコンピューターと周辺機器が、劇的に改良・小型化する時期でした。(以下次号)

2021年前半※の上演候補曲解説 (1)

(※執筆時の想定)

大村 恵美子 (主宰者)

来年の公演のために、カンタータには次の4曲を考えてみました。

先月号では、これらの選曲にいたる経緯や舞台に乗せるに際しての効果、楽譜制作の都合、などに触れつつ、団員のみなさまに検討をお願いしました。4月号、5月号の紙面をお借りして、曲の内容のあらましを紹介します。

まず、バッハが初演したときの用途(教会暦)と年次を掲げてみましょう。演奏時間と当合唱団での上演歴を添えておきます。

①カンタータ第158番《安らかにあれ 慄くころ》

(復活節第3祝日用、1735年以前初演、11分、合唱団既演1964/68)

②カンタータ第94番《いかで世を問わん》

(三位一体節後第9日曜日用、1724年初演、24分、合唱団未演)

③カンタータ第115番《備えよ心 目覚め 祈れ》

(三位一体節後第22日曜日用、1724年初演、22分、合唱団未演)

④カンタータ第16番《主 頌め歌わん》

(新年、1726年初演、20分、合唱団既演2000/16)

この4曲のあとに、長年ペンディングだった世俗カンタータ《コーヒー・カンタータ》BWV211を、もう1年(つまり2020年夏の特別演奏会に続けて ※執筆時の想定)演奏する、ということは、前号の月報にお伝えしておきました。これを加えた総計104分。

個々の曲目の内容を見ていきましょう。

①カンタータ第158番《安らかにあれ 慄くころ》

Der Friede sei mit dir BWV 158

[用途] 復活節第3祝日

[初演] 1735年以前初演

[福音書] ルカ 24, 36-47 (復活したイエス、エルサレムで弟子たちの前に現れる)

[歌詞] 作者不詳

[編成] SB、合唱、ob、弦、通奏低音(11分)

1. レチタティーヴォ(B):「安らかにあれ おののく心」。わずか1分の叙唱の中で、〈安らかにあれ〉という語が7回も呼びかけられる。これは、イエスが復活後に会った弟子たちに、やさしく発した言葉で、それを取り次ぐ者が〈主はなれを愛し かく言いたもう〉と、このカンタータの冒頭で静かに歌うのである。(1分)

2. コラール(S)付きアリア(B):「この世に 別れ告げん」。バスが、こう歌い出すと、合間にソプラノが〈世に別れ告げて み国に向かわん〉と、コラール旋律を、オーボエと一緒に流してゆく。コラール歌詞は、J.G.アルビーヌス「世に別れ告げて」(1649)第1節、J.ローゼンミュラーの旋律(大村編著「コラール・ハンドブック」#139)。バスのアリアには、ヴァイオリン独奏がオブリガートとなって、16分音符と32分音符の速いパッセージで、後奏の最後まで、天国に至る道程の期待を盛りあげてくれる。ト長調、4/4(7分)

3. レチタティーヴォ(B):「主よ 治めたまえ わが心を」。通奏低音のみを伴って、天国で栄の冠を授かる至福の期待を歌う。(2分)

4. コラール:「これぞ まことの過越しの糧」。復活祭のカンタータ第4番(コラール・カンタータ)の基本コラール「キリスト 死に繋がれしが」の第5節を、最終ハレルヤとして歌う。歌詞/旋律ともにM.ルター(1524。「コラール・ハンドブック」#18)。復活の爆発的な歓喜よりも、思いがけぬ主との再会に(エマオの出逢い)、言葉にならないほどのショックに全身打たれた弟子たちの情景を、短いながら生き生きと表わした名カンタータである。ホ短調、4/4(11分)

②カンタータ第94番《いかで世を問わん》

Was frag ich nach der Welt BWV 94



[用途] 三位一体節後第9日曜日

[初演] 1724年8月6日

[福音書] ルカ 16, 1-9 (「不正な管理人」の譬え)

[歌詞] 作者不詳 (コラル・カンタータ)。B. キンダーマンの同名コラル (1664) を基本コラルとする。1, 3, 5, 7, 8 節をそのまま使用。2, 4, 6 節は書き換えて使用。旋律「義しき神 恵みの泉 O Gott, du frommer Gott (ダムルシュタット 1698。『コラル・ハンドブック』 #102)

[編成] SATB、合唱、f1、Ob2、oba、弦、通奏低音 (24分)

1. コラル合唱: 「いかで世を問わん」。2本のオーボエを伴った快活なフルートが、ほとんど休みなしに前奏・間奏・後奏を豊かに活躍させながら、このカンタータの基本コラル第1節を、1フレーズごとに、ソプラノが歌い、下3声部も短くくっきりした動きで、コラル旋律に和してゆく。ニ長調、4/4 (3分)

2. アリア(B): 「世を譬うれば 煙か影か」。独得なモチーフで生き生きと動く通奏低音に乗って、バスが、この世のはかなさと唯一の希望としてのイエスを対比させて歌い、このカンタータ全体のタイトル〈いかで世を問わん〉を強調させる。ロ短調、4/4 (2分)

3. レチタティーヴォ(T): 「華やぎ求めて 高き位に群がる」。オーボエ・ダモーレ2本が、テノールの旋律とは異った軽やかなフレーズを交わし、途中で4拍子になったり3/8になったり、浮き世の浅薄さを描写しながら、〈主こそは永遠(とこしえ)〉と本音を吐露、そして〈いかで世を問わん〉と落ちついて終わる。ト長調、3/8 (3分)

4. アリア(A): 「うわべの世 その富もたからも」。実体のない華やかさに浮かれるこの世でも、イエスこそが本当の〈わが魂の富なれ〉と断じる。フルートが曲の始まりから後奏の最後まで、目まぐるしいほどのパッセージを展開させて、アルトの内容に迫る。アダージョ - アレグロ - アダージョと、テンポも変化して、堂々たる主張となるアルトの大アリアである。ホ短調、4/4 (4分)

5. レチタティーヴォ(B): 「思いわずらい」。これも、アダージョとア・テンポの叙唱を数回反復して、イエスがこの世でむごい恥辱を負わされ、よみがえってわれらの導きとなられた、その逆転の恩寵を讃える。ニ長調、4/4 (2分)

6. アリア(T): 「世は 浅き喜びと愉しみを」。軽快なテンポで、地上の人々の愚かさを描写し、摘発する。弦楽器がトゥッティでテノールを応援。イ長調、12/8 (4分)

7. アリア(S): 「盲(めし)いたるこの世 魂 気遣わず」。ずっと挑戦的な印象で続いてきたこのカンタータの最後に、従順で素直なソプラノの声が〈わがイエスのみ愛し〉と澄んだ心境を歌い、緊張したわれわれの気持も、ほっと救われてくる。オーボエ・ダモーレが、美しいソプラノに励ましを与えるように、キリッとしたりズムのオブリガートを、長い後奏まで聴かせる。嬰へ短調、4/4 (4分)

8. コラル: 「いかで世を問わん」。大規模なこのコラル・カンタータの結論(最終2節)を、堂々とした4声体合唱でさし示して終わる。ニ長調、4/4 (2分)
(③④以下、次号に予定)

合唱団事務局 界限近影



東京バツハ合唱団事務局(大村宅)は、一九九九年一月、ここUR団地内一階に移転し、二十年以上が経過。■左〓主宰者(三月二八日午前・玄關前にて)。この夜の間にも珍しい春の大雪が、数時間だけ降って、満開の桜に白く積もった。■右〓住まい脇の歩道(三月二九日午前)。転居の年の秋、この桜の落ち葉を踏んで、故・杉山好先生が刷り上がったばかりの、フェーリクス著・杉山訳『バツハ』(文庫版)を届けてくださった。団員方と正月のカルトタの想い出もあるが、今は、日本語版楽譜の歴大な在庫などで埋まっています、お招きもできない。

